

を見るべきほどのものは見つ」という経験をしてしまったのが、私の少年―青年時代でした。正直言って、日本も日本人も、あまり好きになれません。と言って朝鮮が自分の故郷だなどと、朝鮮の人に対して気が引けて言えません。同じ朝鮮育ちの作家・後藤藤明生の小説にあった「僕は、どこに帰ればいいのだろう」という一節に、今も同感します。日本育ちの友人たちには説明しにくい漂泊感です。

後年、それでも学校は出してもらい、自分なりの生活ができるようになって、結婚もしました。この連れ合いは生粋の浪速女で、昭和二十年三月の大阪大空襲で焼け出された組です。戦後しばらく、やはり辛苦辛苦の生活だったようです。「我ら夫婦に共通する価値観は、一種の虚無主義だなあ」と笑い合います。

世論調査などで結構回答数の多い「中流の上」などと思いませんが、さりとて格別に貧しいとも感じず、自分の生活のベースさえ守れるなら、それだけで十分に優雅です。マイホームもマイカーも不要。気ままな書物の購入と時折の探鳥旅行、それに時に試みる

いささか贅沢な外食。付け加えると、これだけは欠かせない少量の晩酌で満足しています。財テクなど無縁も無縁。そして一切の權威を信用しません。

敗戦時の小学四年生も、今や人生の残りいくばくもありません。「他人に頼らず、頼られもせず」、二人で仲良く頑張れるところまで頑張ればと願っています。

本当の戦争犠牲者は、戦死者であり、戦病死者であり、戦災死者であり、引揚げ途中斃死した人たちです。彼らの無念を思い、肅然とします。

咸興引揚げ体験

長崎県 酒井 種 寿

一 生い立ちから少年の日の船出

瀬戸内海から四国地方の段々畑を眺めた中国人が「耕して天に至る貧以て知るべし」と言ったとか。私の住んでいた村もそれに劣らぬ急傾斜地で、農家の耕

作平均五十アール。その農家の八人兄弟の二男に生まれた私は、高等小学校卒業後、人並みに大陸への夢を抱き知人の紹介を得て、当時の朝鮮北部の鉄道関係に就職することが決まり郷里を出発した。大正十三年五月初旬のことである。

当時流行のバスケットをさげ、風呂敷包みを持った十六歳の貧相な田舎少年の一人旅である。そのころ、私どもの田舎では朝鮮半島に渡るということが、あたかも親子の一生の別れという感じの時代で、子供をひとり旅させる、今は亡き両親はどんな気持ちだったろうか。バスの窓から見える、母のいつまでも手を振って見送ってくれていた姿が目には浮かぶ。

汽車に乗るのも初めてで、諫早駅を後に下関へ、そして長いプラットホームを渡って連絡船に乗り込んだ。船は徳寿丸で、乗船口には取締りらしい人が二、三人いて監視しているらしいのが、田舎少年の私には怖い存在で、いよいよ遠い国へ旅立つ思いで寂しかった。

釜山から目的地まで三日間の汽車の旅も、車内はゆったりして窓外の風景に見入りながら疲れも知らず

過ごした。以来私の人生は悔いのない青春時代を送ったが、家庭を持ち、やがて戦争、敗戦ですべてがご破算。かつての十六歳の少年はポロポロの服を着て妻と二児を連れ、バスケットの代わりに鍋一個をさげて故国に引き揚げた。この時の引揚船が、戦火の中を生き残ったその昔の関釜連絡船徳寿丸であったことも、奇しき因縁というべきであらう。

二 私の鮮鉄時代

念願かなって就職した駅は職員が駅長以下五人程度の小駅で、付近一帯はりんご畑が果てしなく続いていた。初めて見るりんご畑、開花時季には一面美しい花畑に変わり、どこともなく甘い香りが漂い、のどかな美しい自然環境は望郷の念にかられる自分を忘れさせ、真っ赤なりんごをつけた枝は折れんばかりに地面まで垂れさがり、その燃えるような美しい風景に見とれたものである。

大正十四年十二月九日、新しい木綿小倉の制服を着て希望を胸に初出勤した。

駅長は極めて厳格な人に見え、慣れない仕事に戸惑

う自分は、また注意されるのではないかと常に緊張がとけなかった。しかし今となっては当時の厳格な指導が、ともすれば緩みがちな自分の心を引き締めてくれ、一生を顧みて感謝の念を持ち続けている。

そのころまだ村内はもちろん、駅とて電灯設備はなく、ランプの時代であった。朝鮮語を解しない自分は、乗車券の発売など大変苦労したが、必要に迫られ四、五カ月のうちには仕事上ある程度理解ができるようになった。

駅員は勤務日も列車の発着の間をみて、駅長宅の水汲み、薪割り、風呂焚きなど私用に使われることが当然のこととしてまかり通っていた時代だった。二、三年後には改まったようだったが、時代の変遷を思うのである。

学歴が身分を左右する官界で、小学校しか終えていない自分の身分は最下級の傭人というもので、着る制服もゴツゴツした木綿小倉服であった。それが上級雇員に昇格すると、しなやかなセル服が支給されることになっていて、勤務にも慣れ、多少精神的にも余裕を

感じるようになると、いかにしてもセル服を着たい願望から、当局で毎年一回実施される昇格試験に挑み、就職して三年目に合格し念願を果たした。その昇格試験では、普通学科はともかく、語学の選択科目に英語と朝鮮語が指定されており、いずれかを受けなければならず、今の時世のようにテレビ番組もない独学の自分には、朝鮮語の方が得策と、朝鮮民家に下宿住まいをして勉強に励んだ。

昇格すると他駅へ転勤となり、それから三カ月後には海軍現役徴集のため辞職し、帰郷入団した。

三 海軍現役徴集

昭和五年六月三十日、佐世保海兵団に入団し、半年間の厳しい陸上訓練を終えて駆逐艦乗船組となった。八百トンの二等駆逐艦で兵員は百二十人くらいであった。荒波の上で、猛特訓と山のような大波に酔いつぶれて血を吐いたこともたびたびあった。くる日もくる日もこうした日々が続いたが、そんななかでも月光に照らされた波静かな夜の航海はすばらしく、甲板に出で、きらめく星空を眺めながら戦友と語り合う楽しみ

は、ほかに楽しみとて持てない兵たちにとって唯一の慰みであった。

こうして長い現役満期限三年間近、上海事変が勃発、我が駆逐艦はその方面に作戦出動することになり、波高い東シナ海を越えて警備の任に就いた。幸い戦闘を交えることもなく、半年後服役延期解除となり、三年半にして除隊帰郷が許された。

四 鉄道掌務へ再就職

兵役を終えた私は、世はまさに就職難時代であったが、再び元の職場に就職がかない、貨物係として勤めることになった。そこは朝鮮（北朝鮮）屈指の漁獲高を誇る漁港であり、明太（スケトウダラの朝鮮名）、鰾（びん）の盛漁期になると港内は漁船で満杯になった。貨物上屋に荷揚げされた大量の鮮魚は、直ちに側線に待機していた三十トン貨車に積み込まれ、毎日三十両平均が鮮内各地、遠く北滿の地まで送られるのであったが、そのときの情景はまさに戦場を思わせた。若く張り切った時代、そうした充実した毎日を送るなか、選ばれて龍山鉄道従事員養成所に入所することになった。養成

期間は短い期間であったが、期待に応えるべく努力を重ね、卒業と同時に列車区車掌を拝命した。

乗務区域管内には自然環境に恵まれた景勝地が多く、それぞれの時季になるとスズラン狩りに、海水浴に、紅葉狩りに、スキーにと老若男女の行楽客で車内は超満員、殊に土・日・祝祭日となると車内の整理に手を焼いたものである。

列車への飛び乗り飛び降り、一瞬にして死傷事故を伴う危険なこの職場では、事故がたびたび起きた。動きだした列車から慌ててホームに飛び降りた乗客が、つまずき線路内に転落、轢死した悲惨な例も多い。殊に同僚の事故による痛ましい殉職には、常に危険にさらされている同じ職場の者として、世の無常さを恨み、やりきれない思いをした。

乗務中の六両編成貨物列車転落事故は、私の一生涯の中で忘れられない出来事で、今でも当時のことを鮮明に思い出す。それは、がけ崩れにより線路上に直径一メートル大の落石があり、それに機関車乗り上げ、後部に連結された貨車四両と共に三十メートル下の谷

底に転落、機関車乗務員三人中二人が殉職し、一人が重症を負うという大事故であった。そこは千分の四十という下り急勾配で、線路上に残ったのは、自分が乗務していた最後部の車掌車とその前の貨車二両だけであった。脱線傾斜しただけで危うく難を逃れた自分は運がよかった。現場復旧作業は昼夜三日を要したが、あれから六十年が過ぎた。あれがもし旅客列車であつたならばどのような惨事になっていただろうかと思うと今でもゾッとする。

五 機構改革と従業員養成所

戦域の拡大に伴って、南方から北滿へ、北滿から南方へと通過する軍用列車の輸送力増強が急務となり、機構改革が行われた。鉄道、海事、港灣、航空、税関を一丸とした総合交通管理体制が実現し、鮮内一カ所だけにあつた従業員養成所も三地方交通局に増設された。その後私も咸興交通従業員養成所に転じた。養成科目は駅務科、電信科、機関科など七科目、養成期間は科によって異なり、三カ月から六カ月間全寮制で、教職員は三十二人であつた。決戦体制下経験豊かな従

業員が次々と軍に召集されていき、輸送力増強に伴う従業員補充に、養成所としての使命完遂に日夜努めたが、末期は授業も半減し、飛行機の燃料になるという蓖麻（唐胡麻）の種作りに精を出した。

戦局はソ連の参戦侵攻によって避難してくる多くの人々を従業員養成所に收容することになつたが、そこで幾万もの日本人は故国へ引揚げを許されなのまま、敗戦国民として飢えと寒さ、発疹チフスに苦しみ、ついに一家全滅などの悲劇を生んだ。それは、避難生活之余儀なくされた日本人にとって恨み深いところとなつた。

六 終戦から引揚げ三十八度線越え

(一) ソ連軍侵攻と待機の日々

昭和二十年八月十五日終戦のとき、私は咸興交通従業員養成所に勤務していた。

二日前の八月十三日、突如ソ連軍の清津上陸侵攻により、そこから避難してくる人を收容するために、養成所を充てることになり、着のみ着のままの、憔悴しきつた約一千人の老幼婦女子を收容した。

当時の状況は、運命の三十八度線を越えるのに列車を利用することができたので、避難者は三日後には列車で南下していった。そんな情勢下に軍では「威興在住民の生命財産は軍が保証する。引揚げの際には在住民を軍の先頭にする。落ち着いて平素の業務に精励されたい」と言明されていたので、いざれ正式な引揚げ命令があるのだとの風評もあり、私たちが在住民はその時を期待していたのであったが、その正式引揚げはついに実現せず、脱出まで約一カ年近く悲惨な難民生活を続ける羽目になったのである。

清津からの避難者全員が南下していった後の広い寮内は、しばらくは私の家族四人だけとなり、夜は不気味なほど静まりかえり、終戦の日の夜、寄宿舎から朝鮮人生徒たちの「マンセイ(万歳)、マンセイ」の叫び声が聞こえ、掌を返すような仕打ちが恨めしかった。

そのような混乱の中、八月二十一日には、威興にソ連軍が大型戦車を先頭に、何十台と続いて進駐してきた。なかにはたくましい女兵士もいて、その姿を見てびっくりした。これらのソ連兵たちは日本人を見ると

引っ捕らえて時計を要求し、拒むと銃を向けるので、全く無力の日本人はされるままである。また昼夜の別なく部屋に泥靴のまま上がり、目ぼしいものは彼らが当然のように略奪した。収容所周辺では夜になると銃声が聞こえた。酒、女を要求するときの威嚇発砲である。集団の前で婦人に凌辱を加え、抵抗した婦人が射殺された話も何度か聞いた。女は髪を切り、男装して身を守ったのである。

自分たち家族四人だけになった寮も夜襲を受け、嚴重に戸締まりしていたのであったが、入口で戸を激しくたたきながら、二発の銃声があった。蹴破って入ってこられたら最後、どうなることかと恐怖で生きた心地はしなかった。恐ろしさに泣き叫ぶ子供の口を押さえ、時が過ぎ、ソ連兵はまた続けざまに三発ぶっ放して、無人と思っただけの分らないことを言いながら立ち去っていった。その間十分ぐらいたったろうか、危うく難を逃れ天祐を喜んだ。

引揚列車が出るといううわさが、何度も伝わってはむなしく消えるが、家財道具一切を朝鮮人生徒に記念

として贈り、いつでも直ちに出發できるよう準備し、待機していた。そのころから威興をめざして集まる避難民は街にあふれ、養成所もほかの三つの寮も超満員となつて、投炭練習用のコンクリート敷に周囲に吠（かま）（穀物・石炭などを入れるためのわらむしろの袋）を吊り下げ、寒風にさらされながら凍てつく冬をお互いの体温で温め合いながら苦痛に耐えた。ただ一途に故国への引揚げを念じながら、酷寒期を迎えた避難民は、栄養失調に加え発疹チフスに冒され、何の手当ても受けられないまま、昨日は三人、今日は五人と死亡者は増え続け、そばにいる家族の者も明日は自分も同じ運命をたどるであろう重病人ばかりで、その肉親の遺体をどうすることもできず、遺体と枕を並べてうめき苦しんでいる姿は、まさにこの世の地獄であつた。

そんな同僚・知人の遺体をはるか遠くの山まで背負つて行き、カチカチに凍つた土をスコップで掘り返し、雪まじりの土をふりかけ下山したことも幾度あつたとか。遺体をむしろに包み荒縄でくくつて大八車に何体も積み重ね、あるいは担棒（なひばう）で、凍つた雪道に足をと

られながら黙々と墓地に引つ張つてゆく哀れな姿を、毎日のように寮の窓から見送つた惨状は忘れることはない。

四度目の移動命令で、寮の一室八畳に四世帯が同居することになった。これは窮屈さよりもソ連兵の侵入防止になるため、精神的安らぎが大きかつた。

その十月の終わり、妻が発疹チフスにかかり高熱が続き、一切の食物をとらないのでやせ細り、もはや今日が最後かと思われたが、医師はもちろん、薬の一包もなく、ただ水で頭を冷やしてやるだけで、死を待つばかりになった。それが昏睡状態十四日目にして奇跡的に熱が下がり、食欲も出たようなので畑の野菜くずを拾い、配給のトウモロコシでおじやを作つて栄養を取らせた。

その妻が身動きがやつとできるようになつた十二月中旬、五度目の移動命令があつた。そこは四キロメートルぐらい離れたところで、降りしきる雪をかぶり、厳しい寒風の中、妻と二児を連れやつと着いた家は、入口に戸も壁もなく、板きれを拾い集めて囲いを造り、

なんとか家族は一室に落ち着くことができた。そこにも相変わらずソ連兵は夜中、泥長靴のまま入っては布団の上を踏みつけ、酒、時計などを無心にきて、一時として心休まることはなかった。今まで禁じられていた売り食いでどうにかやってきたが、引揚げの望みも絶えたので朝鮮人の果樹園に働きに行った。

昼食だけは十分食べさせてくれるが、賃金はくれないので、ソ連軍物資の貨車積み降ろし人夫となった。ここでは賃金のかわりに大豆カスの現物支給であった。これは牛馬の飼料、田畑の肥料であるが、当時の我々にとつては貴重な食糧で、支給される量はその日によつて異なっていたが、持ちきれないぐらいくれる日もあつて、それで露命をつなぐことができた。

引揚げの日を楽しみに、わずかばかりの紙幣を子供の着物の襟や草履の緒に縫い込み、大豆を煎り、炒り米を詰めて時期を待つうち、情勢は幾分好転して、集団脱出についてソ連軍は黙認する形に変わりつつあつた。

(一) 咸興出発

昭和二十一年五月十四日、その日もソ連軍物資の積み降ろしに出かけようとする午前八時、日本人世話会から二時間以内に咸興駅に集合するよう通知を受けた。待ちに待った引揚げである。心はずみ、二、三食分のにぎり飯をリュックサックに詰め、子供の手を引いて駅に急いだ。既に駅前広場はボロ服に首から鍋を吊るした者、洗面器を抱えた者など、異様な雰囲気の中にも安堵に満ちた顔の人々であふれていた。

一貨車に百人くらいずつの乗車が終わり、悲惨を極めた思い出の咸興を出発した。昭和二十一年五月十四日午後六時ごろであった。やっと動きだした列車も、途中の駅での停車時間が長く、焦りは増すばかり。とうとう三防という山の中の駅で、けん引機関車を切り離し、全員貨車から降ろされてしまった。そこで保安隊員の嫌がらせの所持品検査を受け、これから歩いて行けという。病みあがりて一人歩きがやっとの妻は五歳の長女の手を引き、私はリュックサックの上に二歳の長男をしぼりつけて背負い、三十八度線を目指して歩き始めた。

二時間ぐらい歩いたところで保安隊員に呼び止められ、ここでも敵しい取り調べが半日続いた。哀訴嘆願既に夕暮れどきで、疲れと空腹で氣力を失い、道ばたにコウモリ傘を突きさし、家族抱き合い夜露をしのいでいると、またまた所持品検査といつて、五人の不良者がリュックサックを開けるといふ。これだけはと最後まで持ち続けてきた長女の晴れ着二枚も、暗闇のなかで掠め取られ、残った空のリュックサックを眺め、何の抵抗もできない自分の無力を悲しんだ。

人里を避け川原にかまどを造り、木の芽や野菜くずを拾って洗面器に塩汁を作り、辛うじて空腹を紛らわせながら、一步一步、故国に近づく楽しみで先を急いだ。

それまで文句も言わずに歩き続けていた四歳の長女も、三日目になると足に血がにじみ痛いといつて地べたに座りこんで泣くのである。心を鬼にして引立てて、ちぎれるほど手を引っ張って歩き続けた。

行く手に何度か、息絶えた幼児をおんぶして歩き続ける婦人、精根尽き果て道端に倒れている老人など見

かけたが、何の手助けもできず、やがては自分たちもこのような運命をたどるのではと、通り過ぎたことを思い出す。道に迷い、朝出発した地点に夕方戻り一日の無駄を悔いた日もあった。

山の中の三叉路で、前にそこを通過したらしい引揚者が木の枝を折り曲げ、正しい方向を表示してあったり、「日本人はこの方向へ」と路面に矢印を書き、無言の方向指示をしてあるのを見て、追われゆく身ではかを顧みる同胞の温かい心情に涙した。

こうして歩き続けること七日目、三十八度線国境が近いらしいとの情報を得た。

その国境線はソ連軍の警戒監視が一段と敵しいといふことは聞いていたが、どの地点かはさっぱり分からない。だがなんとなく静まりかえった周囲の状況から国境に近づいていることは確かだと思った。話し声にも細心の注意を払い、辺りを警戒しながら急ぐ。はるか向こうにソ連兵の監視所らしい建物が見えたときは、さすがに緊張した。ここまでたどりつきながら監視兵に見つかれば、狙撃をうけ銃殺は免れまい。天祐を祈

り、監視所を遠く迂回してそれらしい峠に向かい、子供を引きずりながら必死に駆け登り、反対斜面を無我夢中で駆け降りた。発見されることもなく、ついに三十八度線を突破することができたのである。

もう感激で涙が止まらなかった。付近に炭小屋を見つければ、木の葉を敷き、もう何の心配もなく足を伸ばしてぐっすり一夜を過ごすことができた。夜の明けるのを待って、近くの民家で心のこもった朝食をいただいた親切は、身にしみて嬉しかった。

野宿を重ね、険しい山坂、やぶ道を血のにじむ足を引きずりながら歩き続けた八日間、幾度となく繰り返された保安隊員と称する者の取り調べ、所持品検査になげなしの金は賄賂金に消え、不良者の出没におびえながら、威興をたって二十八日目、ようやく故国に引き揚げることができた。そこには「在外父兄救出学生同盟」という腕章をつけた、若い頼もしい学生が、きびきびした動作で私どもの手を取り、湯茶の接待、慰安演芸会など、真心から迎えてくださったことに感謝し、忘れ得ない思い出となっている。

七 郷里の役場就職

引き揚げた郷里の実家は農家で、両親も健在であったので、我々家族四人が加わっても食・住に不自由もなく、ほかを顧みて日々感謝の生活であったが、その後、兄弟三人が復員して、急に十七人の大家族となり、一日の主食麦を六升も炊くという具合で、両親や兄嫁などは大変であったろう。

このように大勢の同居生活のなか、平穩無事な日ばかりではなく、もめごとがあつてはと年老いた両親は大変心を痛めていたようで、私たち家族のために隣接地に屋根は竹葺きであったが、十六坪の家を新築してくれた。

そうして生業を探すうち、郷里の役場に職を得た。占領軍の指令になる農地改革で農地委員会の書記となり、委員会の設立にあたって役員選任で地主側、自作農側、小作人側と対立が激しく、容易にまとまらず、ついに県職権斡旋で設立ができるまで苦悩が続いた。半年が過ぎ、農地の買取売り渡しも本格的になった段階で、援護係に転じた。

第一次産業七十%で、人口六千人であった村も、引揚者、復員者、疎開者などで八千人を超す状態になり、就職は容易でなく、生活に困窮する者の援護が緊急重要な仕事であった。多くの生活扶助、医療扶助の決定に当たって、真に保護を必要とする者が漏れないよう、信念に基づいて公平を心掛けたが、収入が表面に現れない闇商売が横行する時世で、保護の決定に頭を悩ますことが多かった。村内の沿岸には天然の洞窟が何カ所もあり、そこにどこからともなく住みつく者が後を絶たず、身元も明かさない人が多く、処理に困惑した。女性の同性心中事件、行き倒れなどいくつかの事件も、身元が分からないまま死体を埋葬し、何日かたったころ引取人が判明し、掘り出したことなど、混乱した当時の世相を思い起こす。六年の長い期間であった。

農業面では食料難時代、農産物の増産が至上命令であり、そのため主食の米、麦、甘藷それぞれの育成研究の権威者を、宮崎県その他から招き指導を受けた。特産物でもある甘藷は、一つに三個ぐらい付くのが普通だが、それが二十個まで付けるようになり、麦は

普通一本の茎に穂は一つが常識だったものが、一本から六、七本の穂を出すまで開発が進み、さらに山林原野を開墾して経営面積の拡大を図るなど、村を挙げて増産に励み、戦後の食糧難に寄与し得た自負を持っている。

米あまりで農家は減反を強いられている今、時折思いだすなかに、当時の主食供出割当制度がある。耕作反別に応じ、供出割当数量を指示されながら、それを完遂しない農家に対し、進駐軍食糧係の兵が役場の係員を連れ、容赦なく家宅搜索を行い、厳しく取り締まっていたことなどだ。

爾来いくつかの職場を経験し、定年制も施行されない当時、六十四歳で退職した。

八十八歳になった今、悠久なる宇宙の中であって、人間の一生を考えると、それは一瞬の出来事のように思うが、すべての人類がこの短い人生を幸せに生きていくために「未来永劫、戦争のない平和な世界」を願うばかりである。